



Title	「東京に行く」と「東京へ行く」
Author(s)	山下, 好孝
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 67, 69-78
Issue Date	2014-11-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/58808">http://hdl.handle.net/2115/58808</a>
Type	bulletin (article)
File Information	04_Yamashita.pdf



[Instructions for use](#)

## 「東京に行く」と「東京へ行く」

山下好孝

### 1. はじめに

初心者向けの言語学の教科書に次の2文の意味の違いを説明せよとの練習問題があった。

1) 「東京に行きます」と「東京へいきます」の違いを説明してください。

日野資成 (2009) 『ベーシック現代の日本語学』

この質問は初級の日本語教育の教室でもしばしば学習者からよせられるものである。一言で説明するのはかなり難しい。

私の担当する北海道大学留学生センター、日本語研修コースで用いられている教科書『みんなの日本語初級 I 本冊第2版』では

2) わたしは京都へ行きます。

は例文としてあげられているが、

3) わたしは京都に行きます。

は取り扱われていない。しかし実際の生活の中でこれらはどちらもよく使われている。「へ」と「に」の違いは何かと日本語学習者に聞かれると、私は仕方なく、両者は同じですと説明しているが、内心では本当は違いはあると感じてきた。本研究ノートでは上記の質問に答えるためのヒントを集めてみたいと思う。

## 2. 大野 (2002)

国語学者の大野晋氏はその著書『日本語の教室』（岩波新書）で方向を示す助詞「へ」と「に」について言及している。確かに「へ」と「に」とは同じように使われるとしながらも『万葉集』に出ている以下のような例で「へ」の使い方を説明している。

- 4) 桜田へ鶴鳴き渡る
- 5) 大和へ越ゆる雁がねは
- 6) 都へのぼる
- 7) 筑紫へ遣りて

そして

- 8) 「へ」の上は「大和」「都」「筑紫」などの遠い土地の名が八割を占め、他に「天（あめ）」「新羅（しらぎ）」などもあります。これらも遠いところです。つまり「遠い所に向かって移動する」ときに「へ」を使いました。(p.5)

と説明している。ところが「に」にも同様の使い方があるとし、以下のような例も同時にあげている。

- 9) 家に帰りて
- 10) 韓国（からくに）に渡る
- 11) 水島に行かむ

そこで、「に」のみが使われる例として以下のものをあげている。

- 12) 比良の港に漕ぎ泊てむ（比良ノ港ニ停泊シヨウ）
- 13) 寄する波、辺に来寄らば（寄セル波ガ岸マデ寄セテ来タラ）
- 14) 家づとに妹に遣らむ（オ土産トシテ妻ニヤロウ）

これらの例では「遠いところを目指して移動する」のではなく、「動作が着いて止まる」ことを導いていると説明する。

そして「に」の意味として

15) 結果として確かな地点や場所に止まって動かない

ということを結論としてあげている。つまり「ある場所に着いてそこに居る」ということを表すのである。

さらに、「行く」「来る」「帰る」などの移動の動詞ではなく、他の動詞との共起関係についても言及している。

- 16) a. 球を庭へ投げる
- b. 球を庭に投げる
- 17) a. 机の上へ置く
- b. 机の上に置く
- 18) a. ノートへ書く
- b. ノートに書く

これらの例文の対比から

- 19) a. 移動・移行の方向のときは「へ」
- b. 動作の帰着点をきちんと示したいときには「に」

とまとめている。「帰着点」とは行為の結果としてもものが存在する場所とも解釈できるのである。

大野（2002）の論考は原則的に的確なものであると言える。では、そこで抽出された「に」の意義が他の助詞との比較において妥当性をもつか、以下の節で考察をすすめる。

### 3. 寺村他編（1987）

寺村他編『ケーススタディ日本文法』（おうふう）では、場所を表す助詞「に」と「で」の違いが扱われている。そして両者の違いを次のように要約している。

- 20) a. 存在の場所→「ニ」
- b. 動作、出来事に行われる場所→「デ」
- c. 到達点→「ニ」

(p.16-17)

以上の説明も「に」と「で」の違いに関する妥当な要約であるといえるが、初級のテキスト

で次のような例文が文法の練習問題に現れ、学習者を悩ませている。

21) 私は 地下鉄 (に・で) 傘を 忘れました。

私の日本語母語話者としての直感では「に」が正しいと思うが、「で」で間違いかと問われるとはっきりそう言い切る自信はない。「忘れる」という動詞は「存在」も「到達点」も表さない「出来事」を表す動詞であるからだ。

しかし次の文はどうだろうか。

22) 私は 家 (に・で) 財布を 忘れてきました。

この例では「に」が自然で「で」が使われることはないと思われる。21)と22)の例から考えられることは、目的語「傘」「財布」が「忘れられた場所」にまだあるということである。すなわち「忘れられたものがまだそこに存在する」場合は「に」が選択されるということになる。

そのように考えると以下の例文のニュアンスの違いもはっきりするであろう。

23) 山の上 (に・で) 家を建てる

24) 東京 (に・で) 土地を買う

以上の例文で「で」が選択される場合は、まさに「動作が行われた場所」を示す。一方「に」が選択された場合、動詞の目的語がそこに現在、または未来において存在することを意味する。

かつて流行した歌にマイク真木氏の「バラが咲いた」という曲がある。その歌詞でバラに対して呼びかける台詞で用いられる助詞が一番と二番で異なっているのである。

25) バラよバラよ小さなバラ

いつまでもそこに 咲いてておくれ

26) バラよバラよ心のバラ

いつまでもここで 咲いてておくれ

助詞「に」が選択された場合は、バラの存在を含意し、「で」が選択された場合は「咲く」という行為の継続が含意される。

以上述べたことは以下の例文の対比でも明らかであろう。

- 27) a. 大阪に住む弟
- b. 大阪で住む弟
- 28) a. カナダに留学した娘
- b. カナダで留学した娘

以上の考察から「に」には「行為の結果としての主体もしくは客体の存在を含意する」と言えるのではなかろうか。前節で大野氏が主張した「に」のもつ「確かな地点や場所に止まって動かない」と共通するものがあると考えられる。

一方、「で」は単に出来事、行為が行われた場所を示すというだけでなく、その場所が「限定」されることを含意する。

- 29) a. 北海道に雪が降った。
- b. 北海道で雪が降った。
- 30) a. 札幌に雪が降った。
- b. 札幌で雪が降った。
- 31) a. 庭に雪が降った。
- b. \*庭で雪が降った。(\*は文が非文法的であることを示す。)

これらの例文で助詞「に」を使用した場合、これまで主張してきたように「雪」のその場所での存在を含意する。一方、助詞「で」は出来事、行為が行われた場所を意味するだけでなく、その場所を限定する働きがある。31b) のように降雪の場所が狭く限定されすぎると非文になってしまう。

以上、助詞「に」の特性を「に・へ」の対照に引き続き「に・で」の対照の中で考察した。やはり「に」には「存在」の意味が含意されるのである。

#### 4. 山に登る、山を登る

前の節では場所を表す助詞「に」と「で」の違いを見た。この節では「に」と「を」の違いについて考察する。

- 32) a. 富士山に登った。
- b. 富士山を登った。

これらの文の違いは、「に」を使った場合は「目的地」を表し、「を」と使った場合は「行為

の課程」を表すとされる。そのため「目的地」を含意しない次の例は非文となる

33) \* 階段に上った。

これは、助詞「を」が使われるなら文法的になる

34) 階段を上った。

逆に「行為の課程」を含意しない以下の文は非文である。

35) \* 二階を上った。

したがって助詞を「に」にすれば文法的になる。

36) 二階に上った。

「に」によって目的地を示す文は、結果として主体のその場所への出現、存在を含意すると言えないだろうか。

助詞「に」と「を」に関しては、一連のペアになる行為を表す動詞群と共起する。

- 37) a. 部屋に入る・部屋を出る  
b. 電車に乗る・電車を降りる  
c. 大学に入学する・大学を卒業する  
d. 席に着く・席を離れる  
e. 席に座る・席を立つ  
f. 名古屋に到着する・名古屋を出発する  
g. 成田空港に着陸する・成田空港を離陸する  
h. 舞台に出る・舞台を出る

これらの対比から「に」が使われる場合、ある場所への「登場、出現」を表し、「を」が使われる場合は「退場、退出」を表すと言える。「登場、出現」というのは、とりもなおさず主体のその場への存在を含意する。「を」を使った場合は、存在は含意されない。

以上のような考察から「に」と「で」で明らかになった「に」の「存在の含意」が、「に」と「を」の対比でも観察されるのである。

## 5. 場所+に 時間+に

本研究レポートは「場所+に」を中心に論考を進めてきた。助詞「に」は場所以外に時間を表す表現にも使われる。

しかしながら時間を表す言葉がすべて助詞「に」と共起するわけではない。「に」と共起する時間表現には以下のようなものがある。

- 38) 1956年、9月、14日、水曜日、秋、誕生日、クリスマス、  
創立記念日 2週間後、3ヶ月前

「に」と共起しないものとしては次のようなものがある。

- 39) 一昨日、昨日、明日、今朝、明日、明後日、先週、来月、来年

これらの「に」との共起に関しては様々な説明がある。

- 40) a. 数字のつくもの（7月、1日等）とは共起するが、数字のつかないもの（昨日、先月等）とは共起しない。  
b. 絶対的な時間（1956年9月14日等）とは共起するが、相対的な時間（一昨日、来月）とは共起しない。  
c. 循環する時間（春夏秋冬、月火水木金土日等）とは共起するが、循環しない時間とは共起しない。

いずれにせよ、「昨日、今週、来月」などの語句とは共起しないと言われる。しかし、現実には次のような用法も見られる。

- 41) 北朝鮮、来月に拉致報告  
42) 先週に離婚、来週に復縁

これらの用法は話者の発話時から見た時間というより、何らかの予定表のスケジュールを表していると言えないだろうか。つまり、スケジュール表の時間に存在する出来事を述べていると考えられるのである。場所を表す「に」の持つ「存在」という意味が、時間を表す「に」の用法にも関与しているということである。

もう一つ時間表現に伴う「に」におもしろい現象がある。初級の日本語文法では以下の表現



を対にして教える

- 43) a. ～する前に
- b. ～した後で

前者の「前」に助詞「で」をつけると、時間ではなく「行為の行われる場所」を表すことになる。

- 44) 私のいる前で、殺人事件が起きた。

一方「～した後で」は「～した後に」と置き換え可能な場合がある。

- 45) 旭川行き特急が出た後に、快速電車エアポートが入ります。

この場合も、「に」を使った表現ではなんらかの出来事の出現、存在を含意する。

本研究ノートで取り上げてきた「場所+に」表現と「時間+に」表現には、何らかの「出現、存在」という意味が共通に存在するのではなかろうか。

## 6. おわりに

本研究ノートは方向を示す助詞「へ」と「に」の違いからスタートし、他の助詞との対比において「に」のもつ意義特性を探ってきた。その中で、「に」のもつ「出現、存在」の意味が関与しているのではないかと主張した。

方向を表す表現に関しては室町時代の昔から方言の差があることが指摘されてきた。

- 46) 京へ筑紫に板東さ

この言い回しが表すのは、近畿地方では方向を表す助詞として「へ」が使われ、九州地方では「に」、そして関東地方では「さ」が使われるということである。

最初に引用した日本語教科書『みんなの日本語』で、移動の方向を表す助詞が「へ」で統一されているのは、著者が関西地方出身の人たちであるためかもしれない。

「場所+に」「時間+に」とならんで「人+に」も大変興味ある問題であるが、別の機会に考察することとする。

### 参考文献

- 大野晋 (2002) 『日本語の教室』 岩波新書  
スリーエーネットワーク (2012) 『みんなの日本語 初級 I 第2版』 本冊  
寺村、鈴木、野田、矢澤編 (1987) 『ケーススタディ日本語文法』 おうふう  
日野資成 (2009) 『ベーシック現代の日本語学』 ひつじ書房

(2014年2月26日受付、2014年6月4日受理)

《SUMMARY》

〈Research Note〉

The Difference Between *TOKYO-NI IKU* and *TOKYO-E IKU*

Yoshitaka YAMASHITA

Sometimes my elementary level Japanese students ask me the difference between the following two sentences.

- 1) a. *Watashi-wa Tokyo-ni ikimashita.*
- b. *Watashi-wa Tokyo-e ikimashita.*

The textbook used in our elementary Japanese course explains nothing about the difference. Thus we instructors usually answer that there is no difference here between the directional particles *NI* and *E*. In this research note I try to describe the semantic implication of the particle *NI* in contrast to other particles: *E*, *DE*, and *WO*.

Ohno (2002) argues that *E* expresses direction and *NI* a goal. The word “goal” suggests a place where the subject or object of the action remains after the action is completed. Teramura et al. (1987) discuss the difference between *NI* and *DE* and conclude that *DE* expresses the place of action and the *NI* the place of existence. Finally, from the contrastive analysis of *NI* sentences and *WO* sentences, it is clear that in this last case the particle *NI* expresses the existence of the subject or object of an action.

By analyzing the three contrasts *NI-E*, *NI-DE* and *NI-WO* this research note suggests that the particle *NI* always contains the meaning of existence or appearance.